

教職課程における模擬授業の効果

－授業の過程に対する認識の変化－

宮脇 郁 ・ 柏崎 秀子

1. はじめに

近年、教員の質の向上が強く求められている。そのひとつの表れとして、2012年5月に中央教育審議会の教員の資質能力向上特別部会は、教員養成を修士レベル化することを目指す報告を行っている。このような流れから、大学の教職課程において、高い実践力を持つ教員を育てることへのニーズが高まっているということがわかる。実践力の向上のためには、教育に関する知識を座学により習得するのみでは不十分であり、「教える」という行為を実践的かつ体験的に学ぶことが必要である。

このようなねらいのもと、筆者らが本学の教職課程において担当する「教育方法」の授業では、教育の基本的な方法と技術を体験的に理解させることを目指した試みを行っている（柏崎，2006，2009）。本科目は、教育職員免許法施行規則に定める科目のうち、「教育課程及び指導法に関する科目」の「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）」に対応している。本学教職課程の必修科目であり、2年次の後期に開講される。前期には「発達・学習理論」「教育制度」など、理論的な内容の学習が中心に行われており、後期になって本科目や「教科教育法」など、より実践的な教育方法に関する授業がスタートする。したがってこの時期の受講生には、それまでの「教育を受ける側」という立場から「教育を行う側」へと視点を転換することが強く求められる。

筆者らの担当する「教育方法」は、特定の教科に限定されない一般的な授業方法の知識と技術の基礎を身につけることを目標としている。この科目では、受講生の実践力の向上のために、模擬授業の実施を受講生全員に課している。本稿ではこのような模擬授業の取り組みを報告し、さらに模擬授業を実施することの効果を検討する。以下ではまず、本科目で用いた教授訓練方法であるマイクロティーチングについて簡単に紹介し、次に本科目における実施の試みを報告する。最後に、受講生に対して行ったアンケートに基づいて、模擬授業の実施がどのような効果をもたらしたかを検討する。

2. マイクロティーチングとは

マイクロティーチングとはスタンフォード大学で開発された教授訓練方法であり、“通常の授業に比べて小人数で、授業内容も縮小して短時間で教えることによって、特定の教授スキルを実習し訓練する”ものである（金子，2007, p.132）。この方法では、以下の3つのマイクロ化を行った上で模擬授業を行う（南部，1988）。第1にクラス規模をマイクロ化して、生徒（あるいは学生が演ずる模擬生徒）の人数を10～15名に絞る。第2に授業時間を5～15分程度にマイクロ化する。第3に教授スキルをマイクロ化して、特定のスキルに焦点を当てた授業を行う。これらのマイクロ化により、本来であれば複雑である授業事態が単純化され、被訓練者の心理的負担を軽減した上で特定の教授スキルを習得することが可能となる（小金井，1988）。このため、教育実習生の指導や経験の浅い教員の研修に向けた方法と考えられる。

マイクロティーチングの具体的手順にはさまざまなバリエーションがある。たとえば、よく知られているイリノイ大学の手順は以下の通りである（南部，1988）。

1. オリエンテーション、および教育方法についての授業
2. 事前の打ち合わせと授業のプランニング
3. マイクロレッスンの実施
4. 必要に応じて再レッスン
5. 評価
6. 指導者による個別指導
7. 次のレッスンの準備

以上の手順を見ると、マイクロティーチングには「設計（Plan）－実施（Do）－評価（See）」という授業の基本的な過程が凝縮されていることがわかる。このため、マイクロティーチングはその本来の目的のように特定の教授スキルの習得に役立つのみでなく、授業の一連の過程を体験的に理解するのもにも効果を発揮すると考えられる。

3. 本科目におけるマイクロティーチングの実践

本節では、第一著者が担当する「教育方法」のクラスで2011年度に実施したマイクロティーチングの活動を報告する。第一著者が担当するクラスは2クラスであり、最終的にマイクロレッスンを実施した受講生はそれぞれ39名と30名だった。本科目は、具体的な教授スキルを習得することよりも、Plan-Do-Seeという授業過程の全体的な流れをつかむことを重視している。このためマイクロティーチングにおいても、特定の要素的スキルに焦点を当てるのではなく、Plan-Do-Seeのサイクルを実際に体験してみるところに主眼を置いた。本科目の全般的な進め方は、担当教員が教授過程の理論や教授方法について講義しつつ、その講義内容を受けて、受講生がマイクロレッスンの準備作業を少しずつ積み重ねる、というものであった。このような進め方により、講義により学んだ知識を机上の理論としてではなく、体験的に理解することが期待できる。具体的な手順は以下の通りである。

1) オリエンテーション

初回授業において本科目の目標と内容を説明する際に、受講生全員に15分間の模擬授業を実施してもらうことを告げた。そして早速、模擬授業の目標を設定するという宿題を課した。この宿題は、自らが模擬授業を実施するところを各受講生に漠然とでもイメージしてもらうために行ったものである。したがって、この時点では目標の書き方に厳密さは求めず、まずは自己流で書いてかまわないとした。なお、模擬授業の対象となる生徒は中学生を想定した。受講生には中学校の学習指導要領を配布し、それを参考に自由に目標を設定するように指示した。

2) 正式な目標の設定

授業には目標が存在すること、および目標をどのように記述すればよいかについて講義した。その後、初回授業の宿題にて自己流で書いた目標を、正式な目標に記述し直すという課題を実施した。書き直した目標は、担当教員が添削の上フィードバックした。最も多く見られた問題点は、15分間の授業の目標としてはあまりに具体性に乏しいというものだった（たとえば、「初歩的な英文法を身につける」など）。これはおそらく、授業の目標（学習指導案で「本時の目標」に対応するもの）はかなり具体的なものであるということがよく理解できていないこと、および模擬授業で取り上げる内容を各受講生がまだはっきりとは決められていないことによるものと思われる。受講生にはこのような問題点を指摘し、さらに一部の受講生には目標を書き直すよう求めた。

3) 教材と指導方法の検討

教材研究について講義し、またさまざまな教育メディアの特徴を受講生とともに検討した。その際併せて、放送教育開発センター(1992)製作のビデオ『教師教育教材—教育の方法及び技術—黒板・カード・OHPの活用』を視聴した。このビデオはマイクロレッスンの様子を収録しているため、受講生にとってモデル授業としても機能していた。これらの講義をふまえて、受講生は模擬授業で使用する教材について検討するとともに、使用する教育メディアを選択した。使用可能なメディアは以下の通りとした：ホワイトボード、カード、ポスター、カセットテープ・CD・MD、パワーポイント、プリント。

次に、さまざまな指導形態や技法を紹介し、模擬授業でどのような指導方法を用いるか検討させた。

4) 指導案の作成

学習指導案の構成について説明した後、模擬授業の指導案を書く課題を実施した。ただし時間的制約のため、学習指導案に含める一般的項目すべてを記述するのではなく、本時の指導計画にあたる部分のみを書くこととした。なお、15分という短い授業時間ではあるが、必ず導入・展開・終末の3段階で計画を組むよう指示した。これは、先に述べたように、今回のマイクロティーチングの目的が授業過程の全体的な流れをつかむことであるためである。指導案は担当教員が添削の上フィードバックした。多く見られた問題は、指導過程の記述がわかりにくい、または具体性に乏しいという点である。受講生には問題点を指摘し、さらに一部の受講生には再提出を求めた。また、マイクロレッスン実施当日までに教材等を各自準備するよう指示した。

5) 評価方法の検討

生徒の学習活動の評価、さらに教師の教授活動の評価について講義した上で、模擬授業でどのように生徒の評価を行うか検討させた。短い授業時間では必ずしも十分な評価はできないが、問答や観察などの手段を取り入れて、特に形成的評価を極力行うよう指示した。なお、本来であれば指導案作成の前に評価についての講義を行うべきだが、時間の都合上、このような順序で進めることとなった。

6) マイクロクラスの構成

担当教員が受講生を7～8名の班（マイクロクラス）に分けた。各マイクロクラスの中で受講生が交代で教師役を務め、残りの受講生が生徒役として参加することとした。マイクロレッスン実施の前の週の授業時に、班ごとに事前の打ち合わせを行う機会を設けた。

7) マイクロレッスンの実施

1つの教室の中で、4～6つのマイクロクラスが同時並行でマイクロレッスンを実施した。担当教員がタイムキーパーとして、開始と終了の合図を出した。レッスン中は担当教員が巡回して、各レッスンを観察、評価した。複数の受講生が同時にレッスンを行ったため、十分にその様子を観察できたとは言えないが、必ず受講生全員を観察するようにした。なお、ビデオ撮影は行わなかった。また、生徒役を受講生が教師役にコメントシートを渡すことにより、受講生同士で相互評価を行わせた。コメントシートは、教育メディアの使い方と授業のわかりやすさについて「良い・普通・要改善」の3段階で記入するとともに、良い点と改善すべき点を自由記述するようになっていた。率直な評価を行わせるために、評価者の名前は記入せずに匿名とした。

ほとんどの受講生が模擬授業を行うのは今回が初めてであり、その質にはかなり個人差が見られた。堂々と教師役を演ずる者もいれば、かなり緊張した表情や照れた様子で授業を行う者もあった。緊張が強い受講生に関しては、自分の手元の資料やホワイトボードの方ばかりを見てしまい、生徒をよく観察したりKRを与えたりすることができないケースが多々見られた。また、事前の準備が十分で教材もよく工夫されている受講生がいる一方で、準備が不十分なことがうかがえる者もいた。時間配分については、制限時間を大幅にオーバーする受講生も若干名いたが、むしろ予定より早く終わってしまう受講生の方が多かった。これは、指導案における時間配分の吟味が不十分だった場合もあったと思われるが、それよりは、受講生本人が後に記述したところによると、緊張のため早口となってしまい、思ったより早く進んでしまったというケースが多かったようだった。

8) 授業の評価と改善案の作成

マイクロレッスン終了後に、自らの模擬授業を振り返って評価し、問題点とその改善策をできるだけ多く挙げる課題を行った。そしてその改善策を反映した指導案を作成するよう求めた。さらに、模擬授業の感想を提出させた。すると、緊張した、楽しかったなど、マイクロレッスン実施時の感想に加えて、授業準備の大変さがわかった、大学で授業を受ける際のものの見方が変わったなど、授業に対する認識の変化について述べる者も多かった。

以上が本科目で行ったマイクロティーチングの概要である。今回行った試みにはさまざまな限界がある。第1に、すでに述べたように特定の要素的な教授スキルに焦点を当てたわけではないので、具体的なスキルの習得はあまり期待できない。第2に、教師役のみならず生徒役も受講生が務めた。受講生には事前に、中学生の生徒らしくふるまうこと、模範的な生徒である必要はないことを伝え、したがって発問に対して必ずしも正答を答えなくてもよいし、教師を困らせるようなことを行ってもかまわないと言った。しかし当然ながら本物の生徒と模擬生徒の違いは大きく、班によっては教師役と生徒役との間に若干の馴れ合いが見られた。第3に、各レッスンを担当教員が十分に観察、評価することができなかった。この点については受講生間で相互評価を行わせることによりある程度補ったものの、互いに顔見知りの受講生同士では遠慮が生じ、厳しい評価を行いにくかったと推測される。第4に、マイクロレッスンのビデオ撮影を行わなかった。このため、受講生が自らのレッスンを客観的に振り返る際の材料に欠けていたことは否めない。最後に、マイクロレッスン終了後に指導案の改善を行ったが、再度のレッスンをするまでにはいたらなかった。時間的な制約によりやむをえないことではあったが、受講生に授業改善を実感してもらうために、理想的には再レッスンを行いたいところである。

以上のように今回のマイクロティーチングには問題点もあったが、受講生の感想によると、上述のように授業に対する認識が変わったことを述べる者が数多くいたことから、授業の一連の過程を体験的に理解するという当初のねらいについては一定の効果を得たものと考えられる。

4. アンケートの分析によるマイクロティーチングの効果の検討

次に、マイクロティーチングの実施が、授業に対する受講生の認識にどのような影響をもたらしたか、本科目で行ったアンケートに基づいて検討する。受講生たちは、小学校入学から現在にいたるまで、10年以上学校の授業を受け続けてきている。しかし受講生たちがこれまで目にしてきたのは主に、Plan-Do-SeeのサイクルのうちDo、すなわち授業を実施する場面に限られている。実際には、教師が授業を実施する際には、多くの時間をかけて授業設計（Plan）や授業の評価と改善（See）を行っている。今回はその中でもPlanの部分に注目し、マイクロティーチングを行うことで受講生がPlanについて抱く認識がどのように変化したか、アンケートにより尋ねた。以下ではこのアンケートの回答に予備的な分析を行った結果を報告し、マイクロティーチングの効果を検討する。

1) アンケートの実施方法

アンケートは2度実施した。1回目は初回授業時で、本科目の目標と内容、進め方を簡単に説明した後で、(a)「良い授業とはどんな授業だと思いますか?」、(b)「教師が授業の計画や準備として行う作業には、どのようなものがあると思いますか? 箇条書きでできるだけたくさん挙げましょう」という2つの設問に自由記述で答えてもらった。その際、正しい答えを書くことよりも、現時点でどのように思うかを率直に答えるように指示した。

2回目は一連のマイクロティーチングの活動が終了した後で行った。上述の1回目の記入済みアンケートを各受講生に返却し、1回目の自身の回答を各自確認した上で、同じ2つの設問に改めて答えてもらった。1回目のアンケートを返却したのは、受講生が自らの変化・成長を確認する、と

いう教育効果をねらったためだった。

2) 結果の分析方法

本稿では2つの設問のうち、(b)「教師が授業の計画や準備として行う作業には、どのようなものがあると思いますか?」のみに対して予備的な分析を行った。この設問に対して受講生は箇条書きで列挙する形式で回答しているので、1つ1つの回答を表1のカテゴリーに分類した。そして各カテゴリーの頻度と割合を、マイクロティーチング前後で比較した。

3) 結果と考察

2回のアンケートの両方に回答した受講生は53名だった。列挙されたのべ回答数は、1回目は244個、2回目は224個だった。2回目の方が回答数が少ないのは、1回目の自らの回答を参照しながら書いたことにより、1回目と重複する回答を書くことを避けた者が多かったためと考えられる。

カテゴリー分類の結果を表1、具体的な回答例を表2に示す。まずマイクロティーチング前の結果に注目すると、目立って回答数が多いのは教材に関する項目である。教材に言及する回答数は合計で105個であり、これは43.0%と全回答の半数近くを占めている。中でも「配布物、提示物などの作成」は58個(23.8%)と全カテゴリー中最頻度であり、「下調べ、関連資料の収集」も23個(9.4%)と多い。受講生にとって教材は授業中に直接目にする身近なものであるため、教材の準備というものはPlanで行う作業として非常にイメージしやすかったと考えられる。その他のカテゴリーについては、板書計画に言及する回答がやや多かった(14個、5.7%)。板書もやはり受講生が直接目にするため、思いつきやすかったのであろう。また、「授業範囲の検討」に関する回答も多かった(18個、7.4%)。このカテゴリーに分類された回答は、表2の回答例に挙げたように授業内容について漠然と言及したものである。1回目のアンケート実施時点では、このような漠然とした回答が比較的多く見られた。

次にマイクロティーチング後の結果に注目する(表1)。最頻カテゴリーはマイクロティーチング前同様、「配布物、提示物などの作成」だった(42個、18.8%)。しかしマイクロティーチング前と比較すると、教材に関する回答は合計で67個(29.9%)と減少している。これは、先に述べたように1回目の自身の回答と重複する答えを避けたためというのものもあるだろうが、それに加えて、教材の準備以外にもPlanで行う作業にはさまざまなものがあるのを知ったためということも影響していると思われる。マイクロティーチング前と比較して顕著に増加したのが、第1に「生徒の反応の予測と対処」である。マイクロレッスンにおいて、生徒(模擬生徒ではあるが)と実際にコミュニケーションをとり、ときには予想外の反応が返ってきたという経験が、この項目の重要性を認識するのに役立ったものと思われる。第2に、「時間配分」に言及する回答が増加した。前節で紹介したように、マイクロレッスンで時間配分がうまくいかず、特に早めに終わってしまう受講生が多く出た。このような経験から、授業が計画通りに進むとは限らないことを学び、時間配分の難しさを実感したものと考えられる。各回答を見ても、マイクロティーチング前は「時間配分を考えておく」といったやや大雑把な回答がほとんどだったが、マイクロティーチング後は「時間が余ったときのため練習問題を考えておく」「時間が足りなくなったとき、どうやってまとめるかまで考えておく」など、

より具体的で、かつあらかじめ時間の調整が可能ないように計画を立てておくことに言及する者が数多くいた。その他、マイクロティーチング前より頻度が増加したカテゴリーとして、「授業目標の設定」、「学習指導案の作成」、「評価の計画」が挙げられる。これらはふだん生徒という立場からはほとんど目にするものがない項目である。このように、マイクロティーチングの活動を行うことにより、受講生は授業設計に数多くの要素が含まれることを実感したと考えられる。

5. まとめ

本稿では、筆者らが担当する「教育方法」の授業におけるマイクロティーチングの試みを紹介するとともに、受講生に対して行ったアンケートの結果に基づいて、マイクロティーチングの経験が授業に対する受講生の認識をどのように変化させたかを検討した。第3節の最後で挙げたように、今回の試みには数々の限界があり、今後は多くの改善が必要である。それにも関わらず、受講生のレッスン後の感想やアンケートの結果から判断すると、今回のようにPlan-Do-Seeのサイクルをコンパクトな形で一通り経験することは、受講生の授業に対する視点を広げる上で効果的だったと考えられる。特に、これまで受講生が児童・生徒・学生という立場で授業を受けてきた際にはほとんど意識することのなかったPlanやSeeの存在に気づき、その重要性を認識するにいたったという点で、マイクロティーチングのような活動を通して教授過程を体験することは、実践力のある教員を養成するために一定の効果を上げたと思われる。今後はこのような体験的な学習を教職課程においてさらに取り入れることが望まれる。

表1 マイクロティーチング (MT) 前後のアンケートの結果の比較

	MT 前		MT 後	
	頻度	割合	頻度	割合
授業範囲の検討	18	7.4%	8	3.6%
授業目標の設定	5	2.0%	15	6.7%
生徒の事前調査 (診断的評価)	4	1.6%	5	2.2%
教材				
教科書の読み込み	9	3.7%	6	2.7%
下調べ、関連資料の収集	23	9.4%	10	4.5%
配布物、提示物などの作成	58	23.8%	42	18.8%
その他	15	6.1%	9	4.0%
(小計)	(105)	(43.0%)	(67)	(29.9%)
授業方法				
発問	4	1.6%	3	1.3%
生徒の反応の予測と対処	11	4.5%	26	11.6%
時間配分	11	4.5%	27	12.1%
板書計画	14	5.7%	9	4.0%
その他	20	8.2%	15	6.7%
(小計)	(60)	(24.6%)	(80)	(35.7%)
学習指導案の作成	3	1.2%	16	7.1%
評価の計画	5	2.0%	11	4.9%
リハーサルの実施	5	2.0%	6	2.7%
年間、学期の指導計画の検討	3	1.2%	5	2.2%
その他	23	9.4%	7	3.1%
不明	13	5.3%	4	1.8%
合計	244	100.0%	224	100.0%

表2 授業計画・準備に関するアンケート結果の各カテゴリーの回答例

カテゴリー	回答例
授業範囲の検討	「どんな内容をやるかを定める」「授業をどこまで進めるか考える」
授業目標の設定	「授業の目標をたてる」「明確で正しい授業目標を立てる」
生徒の事前調査 (診断的評価)	「児童・生徒の現状を観察・推察」「生徒の実態を知るためのアンケート」
教材	
教科書の読み込み	「教科書を熟読し、内容を理解する」
下調べ、関連資料の収集	「参考資料をみつけたり、読んだりする」「本やネットでの下調べ」
配布物、提示物などの作成	「プリントなどの作成」「カード、ワークシートなどメディア類の準備」
授業方法	
発問	「生徒への質問事項」「生徒に質問する内容の準備」
生徒の反応の予測と対処	「生徒からの意見の予想」「生徒の反応を予想し、それに答えられる様に考える」
時間配分	「ある程度の時間配分を考える」「時間があまったときはどうするのか、決めておく」
板書計画	「黒板に書く内容を考える」「板書のイメージ」
学習指導案の作成	「学習指導案づくり」
評価の計画	「個人の進度を調べるものの準備」「評価の観点を明確にしておくこと」
リハーサルの実施	「模擬授業を行う」「予行演習」
年間、学期の指導計画の検討	「1年間でのどのようなペースで授業を行うか計画する」

6. 引用文献

- 金子 智栄子 2007 マイクロティーチングに関するわが国の研究動向について－保育者養成課程へのマイクロティーチングの導入と課題－ 文京学院大学人間学部研究紀要, 9, 131-150.
- 柏崎 秀子 2006 教職課程におけるマイクロティーチングの試みとその担当教師の省察 実践女子大学文学部紀要, 48, 57-66.
- 柏崎 秀子 2009 省察できる教師を目指したメタ認知能力の育成の試み－模擬授業の設計と主体的な学びの過程の省察－ 実践女子大学文学部紀要, 51, 36-46.
- 小金井 正己 1988 教授スキルとは 東 洋・中島 章夫 (監修) 1988 授業技術講座基礎技術編 3 教師の実践的能力と授業技術 [基礎編] ぎょうせい pp.1-39.
- 放送教育開発センター 1992 ビデオ 教師教育教材－教育の方法及び技術－ 黒板・カード・OHPの活用 放送大学教育振興会
- 南部 昌敏 1988 マイクロティーチング 東 洋・中島 章夫 (監修) 1988 授業技術講座基礎技術編 3 教師の実践的能力と授業技術 [基礎編] ぎょうせい pp.214-227.